

庭野平和賞奨励賞受賞メッセージ

ひとさじの会事務局長
光照院住職 吉水岳彦

この度は、庭野平和財団様の平和賞奨励賞にご選出を賜り、まことに嬉しく存じます。とはいえ、わたし自身が大きなことを成し遂げたわけではなく、ただ路上で暮らす方々や生活に困窮する方、災害で被災した方々に愚直に向き合わせていただきながら、社会の構造的問題や生きることの苦しみ、はたまた、信仰をもって生きる大切さなど、さまざまなことを多くの人と共に学ばせていただいたにすぎません。ですので、この受賞は、これまで苦の現場で出遇ってきたすべての人と、学び多き活動を援助してくださったみなさまのおかげであると、心から感謝を申し上げます。

かつて、わたしの尊敬する僧侶は「一人すくわれば、骨折りがいは十分です。わが子であってごらんなさい。その子が病氣した時、その子ひとりが助かるためにはどんな骨折りでもするでしょう」と語り、念佛生活のうちに、常に目の前の一人ひとりに慈愛のまなざしをそそぎ、全身全霊で向き合われました。一人のいのちを心から尊く見つめ接することが、一切のいのちに向き合う上で、いかに重要であるかを教えられます。

翻って、わたし自身のことを見つめてみますと、自分の力で救えた人など、いままで一人もおりません。しかしながら、お念佛を申していると、お見守りくださる阿弥陀如来様のまなざしに心励まされ、たとえ自身に力なくとも、目の前で苦しむ人の力になりたい思わせられます。そして、自己の弱さや至らなさを知るがゆえにこそ、多くの人たちと協働し、精一杯の心をつくして目の前の一人に向き合うよう、つき動かされるのです。いまでは、そのような行動の積み重ねが、如来様たちのお喜びになることであり、結果的に、わたしたちを育ててくださるものになっていると確信しています。

また、目の前の一人がホッとする姿を目にすれば、誰もが共に安心を覚えるように、一人のいのちの平安は、その人と縁あるすべてのいのちの平安でもあります。世界各地で戦火が拡大する中で、多くの人が刀杖に^{つるぎ}怯え、死を怖れています。日本に暮らすわたしたちも無関係ではられません。日本は世界の中にあり、世界は日本の中にもあります。今、自分の生きている場所で出会う人の国籍や人種、信仰、思想、生活の違いを知り、そのあり方を尊重し合う中にこそ、お互いの平安と幸せを得ることができるでしょう。まずは、今いる場所で自身の目の前の一人のいのちを尊び大切にしようとして行動することが、真に平和な世を形作る力になると思うのです。

この度の受賞を励みとして、より多くの人と共に、祈りのうちに真の平和のため、目の前の一人に向き合う活動に邁進していきたいと存じます。

合掌 南無阿弥陀佛